

ユトリロへ眼の行くかぎり春うれひ

藤田湘子

私にもユトリロの好きな一時期があつた。パリの風景画のどんよりとした空の色に心底痺れたものだった。

本物を見る機会はなかなか巡つて来なかつたが、初めて見たのは倉敷の大原美術館だった。それまで、どこかで買い求めた複製画を壁に貼っていた記憶がある。

ユトリロの描く教会や建築物には、油絵具に漆喰や石灰が混ぜられ、白をより際立たせるための空の色だったのだと気付いた。

湘子先生は秋櫻子の薰陶を受け、俳句ばかりでなく様々な芸術・芸能に興味や交友を広げていたようである。二・三十代に描かれたユトリロの空には、「春うれひ」に通ずる鬱屈や孤独感が今も感じられる。

1984年(559作) 第七句集『去来の花』鑑賞・轍郁摩